2024(令和6)年度　獨協中学校＜第３回＞入学試験問題 2024・2・2

〔国　　語〕

○ 実 施 時 間 【８：３０～９：２０】（５０分）

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

(1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。

(2) 問題は 一 ～ 四 、20ページまであります。

(3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。

(4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。

(5) 内容に関する質問は受け付けません。

(6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督(かんとく)の先生に合図しなさい。

(7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。

(8) 解答上の注意

・字数指定のあるものは、句読点〔。　、〕および「　」や（　）なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。

・文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験番号		氏名	

一

次の――のカタカナを漢字に改めなさい。

① 干ばつに備えてチョスイ池を作る。

② ジュンジョ正しく並べる。

③ タンジョウ日を迎える。

④ 新しい校長がシュウニンした。

⑤ カイテキな旅で何よりだ。

二

次の①～⑤の――のカタカナを漢字に改めたとき、同じ漢字を――で用いるものを、ア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 路面電車のテイ留所。

ア テイ価格で勝負する店。

イ 車がテイ止するまで待つ。

ウ 問題の解決策をテイ案する。

エ 校テイに出て遊ぶ。

オ 選手がテイ位置に戻る。

② 景気が回フクした。

ア フク班長になる。

イ 急にフク痛を訴える。

ウ 残り物にはフクがある。

エ 往フクの切符を買う。

オ フク雑な事情。

③ 優勝するのはシ難の業だ。
ア 小学校時代の恩シに会いに行く。
イ 本日のシ会を務める。
ウ 優れたシ集を読む。
エ 夏シの頃は夜が短い。
オ 契約を白シに戻す。

④ 成功のための意識改カク。
ア カク命の指導者。
イ 人カクの優れた人物。
ウ 文字をカク大する。
エ 多くのカク度から分析する。
オ カク自の判断に任せる。

⑤ 生物を系トウ別に分類する。
ア 街トウがともる。
イ 資金をトウ入する。
ウ 意見をトウ一する。
エ 食料が均トウに配分される。
オ 検トウすべき課題がある。

三 次の和歌の解説文 Ⅰ・Ⅱ を読み、後の問いに答えなさい。

Ⅰ

春　理想の春

春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらむ

壬生忠岑（注1）（注2）（拾遺集・春・一）

春になったと口にするだけで、雪深い吉野山も、今朝は霞んで見えるのだろうか。

藤原公任という人を知っているでしょうか。①紫式部や清少納言・和泉式部という指折りの作家たちとも知り合いの、平安時代中期を代表する文化人ですが、彼は、数ある和歌の中で、この歌こそ、最高の秀歌だとしたのです。いったいこの歌のどこがそんなに優れているというのでしょうか。

「春立つ」は、立春のことで、暦の上で春になった日。現在の暦では二月のはじめごろに当たります。まだまだ寒い、というより一年でも一番冷え込むころで、しかも場所は奈良県南部の吉野郡の山岳地帯、雪深いことで知られるところです。春らしい様子などどこにもない。でも、そこに春の証拠が発見できた、とするのがこの歌なのです。

では、普通、春が来たことは何によって発見できるのでしょうか。歌の世界では、霞こそが春の到来を表すものの代表とされました。霞は霧とは違うので注意してください。和歌では、霧は秋の季節のもの、霞は春のものです。それだけでなく、現象としても異なります。春、日光によって地表面が温められるようになりますと、上昇気流が発生します。これによって、地上の水分や細かな塵などが舞い上がり、地表近くの空気を濁らせる。冬の間は収まっていたのですね。そして遠くのものをぼやっとさせます。遠く

のものといっても、高いビルやタワーがあるわけではありませんし、奈良や京都は盆地ですから、見えるのは山か空です。それらがぼんやりと見えにくくなる現象が霞なのです。冬の澄みきった空気と対照的で、たしかに春を実感するのにふさわしいですね。

かといって、自然現象としては、立春の日になったからといって、すぐに霞がかかるわけではない。あるいはそれ以前から霞んでいることだってある。つまり春の到来を表す霞は、春らしい風景を待ち望む、期待感の表れなのですね。早く春めいてほしいという願いが込められているのです。その基本をまず押さえておきましょう。②和歌は現実をそのまま再現するものではありません。むしろ、現実には簡単に得られないような、理想的な状態を追い求めるものなのです。

でもいくら理想を求めるといったって、現実をまったく無視してよいだろうか、それでは現実感がなくなってしまうのでは、と疑問に思うでしょうか。そのとおりなのです。昔の人だって、現実感は大事にしていました。理想や期待感・願望にだって、リアリティは必要です。そこで作者壬生忠岑は、こう詠むことを思いつきました。立春になったと皆が言っている。たしかに暦の上では春だ。その証拠に、昨日まで雪が降り積もっていた吉野の山々にも、霞がかかっているのが見える。こんな山奥にも、ちゃんと春はやってきたのだ。いや待て、あれは本当に霞がかかっているのか？　春らしさを求める私たちの期待感が、そういう幻を見させているのではないか？　でも、間違いなく霞がたなびいているのが見えるのだ……。

実際に霞はかかっているのか、そう見えているだけなのか、よく考えるとわからなくなります。真相はぼんやりと謎めいてきます。それこそ春の霞にふさわしいでしょう。こういうのを「余情」といいます。「よじょう」と読んでもいいのですが、昔の人はこれを「よせい」と呼んで、和歌の優れた表現のあり方として重視しました。読み込むほどに歌の内容が深くなっていくような、そして心に染み込んでいくような表現の働きのことです。この場合では、期待感と現実の境目が消えてゆき、その間に溶け込んでいくような読後感を指します。

ついでにいうと、「吉野」という土地柄も、この歌の余情を倍加しています。応神天皇・雄略天皇といった神話的な時代から天皇の行幸（注3）があり、離宮（注4）が置かれていたといわれ、『万葉集』（注5）にも盛んにその美しさが歌われています。そういう遥かな天皇の歴史の昔に思いを馳せるのにふさわしい場所なのです。霞の向こうには、歴史が霞んでいるのです。

注1　壬生忠岑……平安時代前期の歌人。
注2　拾遺集……平安時代中期に作られた和歌集の一つ。
注3　行幸……天皇が他の場所に移動すること。
注4　離宮……皇居以外に設けられた皇族関係者の宮殿。
注5　『万葉集』……奈良時代末期に作られた和歌集の一つ。

Ⅱ

賀　永遠を現実にする工夫

③わが君は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで

よみ人知らず（古今集・賀・三四三）

私の大事なあなた様、千年も幾千年も長生きしてください。小石が成長し大岩となって、そこに苔が生えるまで。

いうまでもなく、現在「国歌」とされている「君が代」の元になった和歌です。『古今和歌集』で、祝いの歌を集めた賀の部の巻頭（一番はじめ）に置かれています。ただし、初句は「わが代」ではなく「わが君」。「わが君」なら、「私の大事なあなた様」の意です。「君」は本来、呼びかける相手をさす二人称の代名詞です。この場合は、お祝いしようとしている人物のこと。主君や天皇に限定されるわけではありません。「八千代」はそのまま訳せば八千年ですが、「八」は嘘 X と同じく数の多いことを示しているに

すぎませんから、永遠という意味になります。「千代に八千代に」と繰り返すことで、いかにもゆったりと流れる永遠の時間の長さが実感されますね。

ただしこれだけだったら、まだ抽象的で漠然としています。「さざれ石」（小石）が「巌」になって苔が生えるまで、という具体性が与えられていることが重要です。永遠は目に見えませんが、こうして物に託されることで、目に見え、肌で感じられるようになるわけです。けれど、目に見えるようになればなったで、永遠といってもその程度のものか、となりかねません。感覚でつかめるはずのないものを、五感で感じられるようにするにはどうしたらよいか。かなりの難問ですね。この歌の工夫は、まさに④それを可能にしている点にあります。

大きな岩が、海の波や川の流れに洗われて小石になる。これなら話はわかります。悠久の年月が必要ですが、それでも有限の時間の中の出来事です。しかし小石が巌になるというのは、物理法則に反した、ありえない現象です。時間が逆流するわけです。おとぎ話のような、といってもよいし、少し恰好をつければ、神話的な時間ということもできる。神話の中では、人が若返ったりすることがよくありますね。この歌を味わう人は、まず大岩が小石になるという現象をどうしてもイメージしてしまいます。そしてその上で、いやいやそんな現実のことではないのだ、⑤人間の世界の話ではないのだ、とびっくりさせられるのです。

小石が大岩になる、という話は、中国の唐の時代の随筆である『酉陽雑俎』という書物の中に出てきます。そこから発想を得たのかもしれません。でも別に『酉陽雑俎』を知らなくても十分にこの言い方の面白さはわかりますし、なによりこの発想がうまく生きるよう工夫されていることが大事です。

⑥さらに工夫は続きます。「苔のむすまで」です。「むす」は苔や草が生えることで、漢字で書けば「生す」。苔が生えるのにも長い時間が必要ですが、それでも大岩が小石になるよりはずいぶん短い時間ですみます。せっかく神話的な時間を示したのに、これじゃあ矛盾している、と思うでしょうか。いいえ、神話的な、非現実的な時間を示すだけなら、現実に存在する人をお祝いするという目的から離れてしまいかねません。そんなありえないことをいったって大げさすぎる、と笑われてしまうかもしれない。けれど「苔が生える」という、長いといっても十分人間が体験できる範囲の時間で受け止められることによって、その前に置かれた神話的な時

間も、やっぱり人間の世界のことだったのではないかと、錯覚してしまうのです。人間にとって想像の産物でしかない「永遠」を、現実のものとして感じさせる工夫だといえるでしょう。そういう工夫を感じ取って、この歌は、歴史を越えて愛唱されてきたのです。

「わが君は」の歌は、相手の寿命の長さを祈り、祈ることでお祝いの歌としていました。お祝いの和歌の基本は、この長寿の祈りが基本です。たしかに、四十歳になると「四十賀」という賀宴を開きました。今なら六十歳の還暦のお祝いに当たるでしょうか。つまり、四十歳でもう長生きの仲間入りなのですね。とくに若くして、あるいは幼くして死ぬ人は、今より圧倒的に多かったことでしょう。逆にいえば、お年寄りは、神仏のご加護に恵まれた、神や仏に近い存在だったことでしょう。長寿を祈る歌には、信仰心に類するものが宿っているのかもしれません。

（渡部泰明『古典和歌入門』岩波書店より）

注6　古今集……平安時代前期に作られた和歌集の一つ。『古今和歌集』と同じ。

注7　賀の部……和歌集内での、祝いの歌である「賀の歌」を集めた部分。

問1　――①の人物によって書かれた作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　平家物語　　イ　枕草子　　ウ　竹取物語　　エ　源氏物語　　オ　徒然草

問2　――②について、次のように【ノート】にまとめました。【ノート】の中の［　　］A～Dにあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で［Ⅰ］の文章中からぬき出して答えなさい。

【ノート】

・和歌は現実をそのまま再現するようなものではなく、［A（六字）］を追い求めるものである。

←［しかし、［A］を求めすぎて現実を無視してもいけない］

・壬生忠岑の和歌での［A］

立春の日になり、雪が降り積もっていた吉野の山々にも霞がかかっているのが見える。山奥にも［B（一字）］が来た。

←しかし

本当に霞がかかっているのだろうか。［B］らしさを求める私たちの［C（三字）］がそのような幻を見せているだけなのか。

○壬生忠岑の和歌の表現

実際に霞はかかっているのか、そう見えているだけなのか、真相はぼんやりと謎（なぞ）めいてくる。このように読み込むほどに和歌の内容が深まり、心に染み込んでいくような表現を「［D（二字）］」という。

問3　――③の和歌は何を祈り、祝う歌だと筆者は理解していますか。［Ⅱ］の文章中から八字でぬき出して答えなさい。

問4　［　　］Xに当てはまる二字を漢数字で答えなさい。

問5　――④「それ」が指す内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　永遠を意味する言葉を重ねて用いることで、歌を味わう人が永遠の時間の長さを五感で感じること。
イ　自分にとって大切な人への思いだけでなく、雄大（ゆうだい）な自然を育ててきた永遠の時間の長さの壮大（そうだい）さを表現すること。
ウ　漠然としている永遠の時間の長さを、目で見たり、肌で感じたりできないようにすること。
エ　感覚ではつかめるはずのない永遠を、五感を通して感じられるようにすること。
オ　目に見えない永遠を、物に託して感覚的に分かるようにして、大したものではないと感じさせること。

問6　――⑤とありますが、ここでの「人間の世界の話ではない」とはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。

問7　――⑥とありますが、「苔のむすまで」という表現からはどのような効果が生まれたと筆者は考えていますか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　和歌の内容を神話の世界の話なのだと改めて認識させる効果。
イ　現実の世界では「永遠」は存在しないと実感させる効果。
ウ　現実に存在する人をお祝いするという目的をぼんやりさせる効果。
エ　想像するしかない非現実的な時間の長さに自然の雄大さを加える効果。
オ　前に示された神話的な世界も人間の世界の話なのではないかと錯覚させる効果。

四　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今はベテランの漫画家である「俺」（タカシマさん）は、漫画家としてデビューするまでなかなか作品が認められず、自分の作品を読んでほしいと出版社の編集者に土下座をしたことがある。しかし、周囲にはそれを言わず、運よくスムーズに漫画家になることができたという「デビュー話」を様々な場所で語っている。一方、「俺」の助手である「砂川」は、初めて描いた作品があっという間に大ヒットした。その後、「砂川」と先輩である「俺」は喫茶店で雑誌の取材を受けることとなり、二人は取材後もそのまま店に残っていた。

そのとき、店主がカウンターの中で、小さく「ん」と声を上げた。

きょろきょろっと、何かを探している。

するとウエイトレスが音もなく歩いていき、レジ脇の引き出しから輪ゴムの入った袋を取り出した。そしてカウンター越しに、店主に向かってぽん、と放る。

店主はうまくキャッチし、黙ったままちょっとだけその手を掲げて笑った。ウエイトレスも何も答えず、店主と目を合わせ、唇の端をほんの少し上げた。

……なんだ、今の。

あのウエイトレス、どうして店主の探し物がすぐわかったんだ？　そして受け渡したあとのアイコンタクト。すごくないか。一言の声も発することなく、［　＊　］かよ？

ふたりの呼吸を目の当たりにして、俺は思った。

仲がいいとか悪いとかじゃないのかもな。きついこと言ったり無口だったりする反面、言葉がなくても通じてしまうほどに、あのウエイトレスは店主の理解者なのかもしれないな。

そしてそのことを、店主はちゃんと気づいているんだろうな、きっと。

テーブルがブブッと振動した。砂川のスマホだった。

砂川はスマホを人差し指でささっと撫で、はっと動きを止めて目を見開いた。

「どした？」

「……ブラマン[注1]のアニメ化、決まったみたいです。編集さんからメールで」

「おおっ！」

俺はぐうっと拳を握る。

「やった……！　やったなあ、砂川！」

バシバシと砂川の背中を叩くと、ヤツは体をよじらせて逃げた。

昨今の漫画家にとって、賞はもちろんありがたいものだが、やっぱりアニメ化はでかい。これで一気にキャラクターの絵が多くの人の目に触れるようになって、爆発的に読者層が広がる。

俺はべつに、ブラマンがアニメ化されることに驚いて熱くなっているわけじゃない。そう遠くない未来にそうなるとは思っていた。ただ、砂川がそれを知る瞬間に立ち会えたことにすごく興奮したのだ。

嬉しかった。俺の好きなあの漫画が……砂川のブラマンが、俺の目の前でどんどん大きく育っていくことが。

「おまえ、もっと喜べよ！」

「……喜んでます」

まったく嬉しそうでもない砂川の、スマホ画面にあてている指が小刻みにふるえていることに、俺はようやく気づいた。俺はなんだか心がほわっとして……そして申し訳ない気持ちにもなった。

俺はなんでも、わかりやすく表に出ているものだけで判断していたかもしれない。こいつのこと、今までどれだけちゃんと見てい

たのだろう。

砂川はスマホを操り、担当編集者が送ってきたＵＲＬから、今回のアニメ制作に関わる会社のサイトや、楽曲の候補となっているミュージシャンについての情報を見た。俺は亀みたいに首を突き出し、一緒になって砂川のスマホをのぞく。

細かい字がうまく読み取れず必死で文を追っていたら、案の定、目がしばしばしてきた。ドライアイには潤い補給。俺は目薬を取り出そうと、バッグの中を探る。

目薬を手に取りながら、俺は風呂に入ったみたいないい気分になっていた。すっかりゆったりさっぱり、のんきに砂川に声をかける。

「いや、ほんとにさぁ。運がいいだけの俺とは違って、おまえ、才能あるよ」

砂川はふとスマホから顔を上げ、抑揚なく言った。

「タカシマさんって、運いいですか？」

「へ？」

急に冷や水をぶっかけられたような気がした。

俺が目薬を片手にぽかんとしていると、砂川は淡々と続ける。

「編集さんから聞きましたよ。タカシマさんが栄星社[注2]で最初に持ち込み[注3]見てもらった編集者って、志願者つぶしで有名だったみたいじゃないですか。電話を取った編集者が持ち込み受けることになってるから、そこで当たっちゃうなんてのっけから運悪いですよ。その人、経費の使い込みがばれて一年でクビになったみたいだけど」

あわわ、と口が開く。［A］の句が継げないままの俺をよそに、砂川はたたみかけた。

①「あのデビュー話、タカシマさんはアレンジしてるけど、編集部では伝説になってますよ。原稿読んでくれってトイレで土下座した男って、秘話の秘話となって。デビューのお膳立てしてくれた局長だって、すぐ定年退職してマレーシアにリタイア移住しちゃって、そのあとタカシマさん、二作目にこぎつけるのにだいぶ苦労したそうじゃないですか」

かあっと［B］に血がのぼった。土下座したことまで話すなんて、局長のおしゃべりめ。そして編集部で知られているとも思わず、局長が海外にいるのをいいことに都合よく吹聴していた俺って、なんてまぬけなんだ。

②「なんだか騙された気分だった。砂川はいつから知ってたんだ？　そういうことはもっと早く言ってくれよ。［C］っ恥じゃないか。

「それに、タカシマさんってじゃんけん弱いし、宝くじ毎回買ってるけど当たったためしがないし、電車乗ってもたいがい座れないし、仕事場のティッシュ箱、最後の一枚はだいたいタカシマさんが引いて新しいの出してるし、ネットで買い物するとびっくりするくらいしょっちゅう不良品に当たるし」

「……う」

何かのスイッチが入ったみたいに、砂川は多弁になった。まるで責められているような気持ちにもなる。そしてヤツはぴしりと鋭い利な刃を刺した。

「ぼく、タカシマさんが運のいい人だなんて思ったこと、一度もないですよ」

やめろ……俺をこれ以上、みじめにさせるな……。

ああ、そうだよ、たしかにそうだよ。才能がないから、せめて「運がいい」なんて自分で自分にそう言い聞かせているだけだよ。俺は運すらいいわけではなく、あのデビューはすべて局長の人徳のおかげでしかない。

「まあ……そうかもな。俺は単に、局長に救われたというか……」

認めざるを得なくてしどろもどろになっている俺に、砂川はぷるっと首を横に振る。

「タカシマさんが局長に救われたんじゃなくて、作品がタカシマさんに救われたんです」

は、と俺は砂川を見た。砂川は透き通った瞳で俺を見つめてこう続けた。

「タカシマさんは、運じゃなくて努力の人です。ぼくは尊敬してます。すごく」

なんだよ……なんなんだよ。

そんなことを言いながらも、砂川は表情を変えない。体が熱くなるのを感じながら俺は、砂川の言うことには一塵の嘘もごまかし

もないのだと確信した。

ヤツはいつもそうだった。大事だと思うことからは、決して目をそらさない。ネーム切り、ペン先の使い分け、コマ割りの運び。俺のそばで、水をぐんぐんと吸い上げていくスポンジみたいに技術を自分のものにしていった砂川。

そしてそのとき同時に、俺のこともずっと見てくれていたんだ。

X

ほ、と胸をなでおろしたい気分だった。

俺も、ちゃんと気づくことができて良かった。

俺のことを誰よりも認めてくれる、無口な理解者がすぐそばにいたことに。

飲み干したトマトジュースのグラスが、うっすらと赤くぼやけている。俺は砂川に顔を向けた。

「今日の対談、おまえと一緒に雑誌に出られて嬉しかったよ。すごくいい記念になった。ありがとな」

砂川は依然、ニコリともせず答える。

「いえ、こちらこそ。こういうことでもないとぼく、自分からタカシマさんに会いたいとか言えないから」

つっけんどんな物言い。砂川だ、これが。

俺は「そういうことは、もっとにこやかに言えよ！」と言って笑った。笑った。

笑ってるのに。

どういうわけだか涙目だ。目薬なんて、やっぱりいらなかった。

（青山美智子『赤と青とエスキース』ＰＨＰ研究所より）

注1　ブラマン……砂川のデビュー作。

注2　栄星社……出版社の名。

注3　持ち込み……出版社に直接持ち込む原稿のこと。

問1　［　＊　］に入る四字熟語として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　一期一会　　イ　空前絶後　　ウ　異口同音

エ　以心伝心　　オ　一喜一憂

問2　［　　］A～Cに入る漢字一字をそれぞれ書きなさい。

問3　——①とありますが、「俺」は自分が本当は何によってデビューできたと考えていますか。本文中から五字でぬき出しなさい。

問4　――②のような「気分」に「俺」がなったのはなぜだと考えられますか。理由としてふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　デビューのお膳立てをしてくれた編集部の局長が、実はすぐにこっそり定年退職をしていたから。
イ　編集部の局長は、実はすぐにでも「俺」の原稿を読んでくれるつもりだったから。
ウ　トイレで土下座をしてまで局長に原稿を読んでもらったことを隠していたが、実は編集部の人々はそれを知っていたから。
エ　宝くじを買っても全く当たったことがないことを誰にも言わなかったが、実は「砂川」には知られていたから。
オ　漫画家としてデビューした頃は色々と苦労をしたことを秘密にしていたが、実は「砂川」はそれを知っていたから。

問5　「砂川」は本文中でどのような人物として描かれていますか。次の中からふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア　自分の感じたことが、全く表に出ない人物。
イ　どのような場面においても、言葉を発することが苦手な人物。
ウ　何が起こっても全く動じることがなく、平静な心を保ち続けることができる人物。
エ　自分が大切だと考えたことに関しては、はっきりと伝える人物。
オ　体裁をつくろわずに、つっけんどんな物言いをすることがある人物。

問6　獨太君と協平君という二人の生徒が、本文の最終部分の表現について話し合っています。次の二人の会話文を読んで、後の問いに答えなさい。

獨太　「笑ってるのに。どういうわけだか涙目だ。」って不思議な表現だよね。「俺」は笑いながら泣いているってことだよね。この直前にある「砂川」の言葉や態度が面白くて、笑いすぎて涙が出ちゃったってことなんだろうか。
協平　いいところに注目したね。「俺」と「砂川」の関係を読み取ることができる、すごく大切な部分だと思うよ。まず、直前の「砂川」の発言が面白すぎて涙が出た、というのは違うと思うね。だって、それよりも前に［　a　］という一文があるじゃないか。この時すでに「俺」が涙ぐんでいることがわかるからね。
獨太　うーん、ということは、何か「俺」が涙ぐむような気持ちになることがもっと前の部分にあったということか。
協平　――X「ほ、と胸をなでおろしたい気分だった」という部分に注目するといいよ。そもそも、「俺」はなぜ「胸をなでおろしたい気分」になったのだろうか。
獨太　それは、「俺」が［　b　］からではないかな。
協平　そうそう。だから思わず涙ぐんだのだろうね。
獨太　なるほど。でも、そもそもそんな気分になった直接のきっかけは何なのだろう。
協平　それは、「砂川」が［　c　］ことだと考えられるね。
獨太　そういうことか。そうそう、もう一つ聞いてもいいかい。――Xのすぐ後に「俺も」ってあるよね。「も」ってことは、他にも誰かいる、と「俺」は考えているということだよね。
協平　君は鋭いね。その人は、［　d　］だろうね。
獨太　君のおかげでとてもよくわかったよ。僕たちもこの二人に負けないくらい、いい関係だよね。

（1）［a］に入る一文を本文中からぬき出し、最初の五字を書きなさい。

（2）［b］を、「理解者」という言葉を用いて五十字以内で答えなさい。

（3）［c］を、「運のいい人」という言葉を用いて四十五字以内で答えなさい。

（4）［d］に入る言葉を、本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

このページに設問はありません